田中琢・佐原真編集代表『日本考古学事典』

冨井　眞

はじめに

「辞典編集の仕事は、あまりにも労多くして、できてみるとそれほど見ばえのするものでもない。良く言われるように、間違いがなくてあたりまえということで、辛苦の一字一句も、専門家でない一般の人には通じないのである」、とさる辞典の書評で述べられている（山田信夫「京大東洋史辞典編纂会編『新編東洋史辞典』」『史林』第六四巻第二号、一九八一年、一三九頁）。また、編集の側からは、「辞典の編集は、言うは易く行うは難しい」、と吐露されることもある（江坂輝彌・芹沢長介・坂詰秀一編『日本考古学小辞典』、ニュー・サイエンス社、東京、一九八三年、編者言）。本書も十余年に及ぶ編集の御労苦の末の成果であり、編集委員の御尽力にまず敬意を表したい。そして、後述するように、斬新な試みを実践された御姿勢にも頭が下がる思いである。その御労苦御姿勢に対して、一聞では矛盾すると感じる向もあろうが、評者の率直な感想から述べよう。「ようやく日本考古学界にも改訂版を期待できそうな事典が刊行された」、と。

日本考古学界における辞典・事典（以下、事典類と呼称）の産出には、昭和二六年以来（酒詰仲男・篠遠喜彦・平井尚志編『考古學辭典』、改造社、東京、一九五一年）、五〇余年の歴史がある。そのなかで、いずれも刷りを重ねこそすれ第二版を登場させるには至っていない。基本的にはそれらの編集方針や項目選定がある意味で完結していたからであり、改版の必要が生じるならばそれは考古資料の蓄積による内容の補訂に起因するであろう事が予測されていたからである。これは、日本考古学の学問的枠組みに対しての自己完結的な作業成果とも言える。純粋な学術探究のための事典類であって、その学問をいわば内側から捉えた大成であった。従って、それらが日本考古学のある種の到達点として意義の甚深なることは疑いない。

こうした歴史にあって、本書にはこれまでの事典類には見られなかった新しい試みがある。「なお完成途上にある」（本書「読者のかたがたへ」より、以下、本評論では序文と改称）、と編集代表がさらなる向上を目指すその幾つかの取り組みは、今後の日本考古学を内側から推進させていくという既存の類書と同様の意義もさることながら、斯学が外側すなわち社会からも支持され続けるよう努めねばならないと気付かせるという重要性をも帯びている。この外側からの支持こそ、正に今日までの日本考古学一二〇年の展開を特徴付ける一面であり、そこに配慮する編集姿勢の発展的継承を評者は期待している。さきの少々物騒な感想もこうした期待ゆえである。学問の外側に対する意識は、考古学に限らず、各学問分野なかでも実学ならざる人文学にとって、自学の社会的存在としての位置付けをも左右しかねない故に重要なのである。

一　方　法――事典評論の試行

いわゆる人文学において、研究書の書評がその論理構成への言及をも一つの方法とするのであれば、事典類の書評には編集の方針とその実践への評価が一つの方法として存在してもよい。もちろん前者にあっては具体内容の吟味も重要な切り口であるけれども、後者においては、各項目の内容を熟読吟味してその項目内での視点や情報の多寡を論じるようなことは、それはそれで一つの解題的作業として成立するであろうが、研究者個人の手に負える作業ではない。まして項目執筆者の大半の方々よりも若輩非才の評者においてをや。従って、もちろん評論の例示として項目の幾つかを採り上げることは避けられないが、評者はその内容の妥当性等を直接議論することを目的とはしない。本評論では、本書について、まず序文や宣伝パンフレットに明言された製作の側からのセールスポイントとその実践を評し、続いて一読者としてそれらには現れなかった観点から論じてみたい。なお、本評論で用いた【　】は、その語が本書に採用されている項目であることを示している。

二　評　論　一――セールスポイントについて

本書の特質は、製作の側によれば、大きく六点ある。序文で挙げられた順に従えば、動詞の項目を立てて人間の行為の復原を目指した点、未来への足がかりとして現在の考古学の立脚点の明確化を心がけた点、アジアおよび世界の考古学と日本との対比の視点から記述した点、近接諸学の研究成果との対比と総合を目指した点、これら四点は、宣伝パンフレットにも大きく掲載されているセールスポイントである。そして、土器型式名や遺跡名・人名を項目として採用しない点、引く辞典であると同時に読む事典たらんことを企図している点、この二点が加わる。以下、この六点に沿った評論を行う。

(1)　動詞の項目立て

「人の行為の全体像を明らかにすることが考古学研究の出発点」(序文より)、という姿勢を根本から否定できる考古学者はいないだろう。その実現性はともかくとしても。しかし、この出発点から、考古学従事者として我々はどのように足を踏み出してきたのだろうか。考古学が明らかにする人の行為の全体像を表現するべき当代の考古学研究者は、結局のところ、うまくそれをかたちにしてこなかったのではないか。それを気付かせてくれたのが、本書の動詞項目の採用である。例えば、【食料】と【食べる】の関係は絶妙である。前者では、人類史的に捉えた食料の重要性や、過去の食料の復元方法について、当代の観察者の視点で扱っている。一方で後者では、摂取食物や調理方法について、いわば歴史における行為者の視点で丁寧に解説している。現在と過去、分析の主体と客体、そういった両輪が見事にかみ合っているのである。動詞の項目立ての意図は、おそらく後者の視点、つまり分析客体たる過去の行為者の視点の重視にあるのだろう。そして実際に本書のように、双方の視点を項目立てに反映させてその対照性を浮き彫りにすることによって、過去を研究する学問の外側にいながら過去の人間の行為や産物に関心を持つ人たちとその学問との距

離は、少しずつ狭まるのではないだろうか。もちろんこのような視点は、これまでにも博物館の展示の主題などにしばしば反映されているけれども、そこでは展示という性格ゆえに一つの動作・行為にのみ焦点を当てることになる。幾つもの「行為」を凝縮して収録している点が本書の斬新さである。ひとり考古学のみでなく、広義の人類史研究の全体で、今一度この視点の実践を検討する必要があろう。

当代に存在しない分析客体の行為は、もちろん当代の観察者の目にすることのできる考古資料と一対一の対応関係にあるわけではない。例えば、【回す】行為を直接的に物語るのは【錐】【轆轤】【車】などであり、間接的に示唆するのは【唐居敷】などである。そして、【回す】行為者の側の視点の導入によって、【錐】【唐居敷】といった多様な物質文化ないしは考古資料が、いわば資料横断的に連関されるのである。確かにこの新しい試みは、新しさゆえの未完成からは逃れられない。動詞項目の中には、【掘る】のように当代の分析主体の行為まで解説されているために編集の意図をぼやけさせてしまうものがある。また、例えば、遺跡調査でよく確認される過去の行為の痕跡の一つに焼土があるけれども、本書には項目としては「焼土」や「燃やす」がない。このほか、【住居】【居館】【城館】といった遺構を生み出す「住む」行為、あるいは遺物に残る【叩目】や遺物そのものとしての【敲石】【槌】【扉】などにあらわれる「叩く」行為、こうした行為についても項目立てが望まれる。しかし、評者の高望みもこの試みがあってこそであり、何よりもまず記念すべき一歩を高く評価したい。

(2) 現代の考古学の立脚点と展望

「現在の考古学の立脚点を明確にする」という宣伝パンフレットの文言はもちろん、項目の解説文における研究史的背景の追求姿勢を形容している。この姿勢は、事物について行数を割いて解説している項目の多くで徹底しているようである。考古学に直接的に関わらない読者には聊か冗長に感じられようが、考古学界では、研究成果そのものは当然としても、研究史理解も重視・評価されているのである。その意味において、この方針は考古学従事者には首肯できる。さらに、項目によっては、今後の研究のための分析や検討の視点も提供しており、文字通りに「未来の日本考古学を展望する足がかり」(序文より)、となっている。

立脚点について、序文では学術研究上のことにしか直接言及していないけれども、こうした学術研究の進展を促してくれる資料の産出、つまり考古学的諸調査の歴史に関して、【発掘調査】【報告書】といった項目は解説が詳しい。そしてこの詳細さに触れた評者は、この宣伝文言には、考古学従事者は斯学のなかでの立脚点だけでなく純粋な学術研究の外側のそれ、すなわち直接従事者以外との関係をも正視すべきである、という編集代表者の意図が語裏に忍んでいるのではないか、との推測に至る。後述する自然科学的手法の導入と並んで編集代表者が尽力してきた、考古学の社会関与性の追求が、「われわれの考古学が現在おかれている学問的状況がいかに形成されてきたか」(宣伝パンフレット「編集委員のことば」より)、という言葉の背後にも示唆されているのではないか。なぜなら、そのような視座に立って採用したと思われる項目の執筆は、ほとんど全て編集代表者によるのだから。現

代における日本考古学の支えの、内側すなわち学術性だけでなく、外側すなわち社会性も捉える視座を内包していること、これもこの分野の事典類で他に例を見ない。そして冒頭でも述べたように、この視座の維持にこそ、実学でないばかりか資料産出の多くの部分を社会のある種の犠牲に負うている考古学の、未来がかかっているのである。少なくともそうした項目、すなわち本書「この事典を読むために」（以下、本評論では手引きと改称）に挙がっている項目で言えば、【考古学】【発掘調査】【文化財保護】とそこに参照されている多くの項目を、まず御一読いただきたい。それぞれの内容という意味よりもむしろ、それを採り上げる姿勢という意味でも、本書が評価されてしかるべきである。今後もこの新しい取り組みを進め、「出版」や「教科書」といった項目が追加されることを期待したい。

(3) アジア・世界との関係性

日本を冠した事典ではあるけれども、その日本を浮かび上がらせるためには、ある程度の空間規模の比較相対化が不可避である。考古資料は分類・比較を重ねてその学術的価値を漸高させるものであるから、比較対象は、研究主体の帰属意識に直結する自治体や日本国という空間のみに留まるべきではない。本書にあっては、扱う時代の古いものほど日本と他の東アジア地域との比較が少ない項目もあるが、総じて、日本の相対的位置の提示に配意が見られる。ただ、採用項目の幾つかには、その比較意識の勇み足を思わせるものもある。例えば【高坏】だけでなく【籩豆】が採用される点は、東アジア的視点を過度に意識したのではなかろうか。あるいは、世界考古学との対比というねらいは、【ニュー＝アーケオロジー】【ハンド＝アックス】などで日本での位置付けに関する解説にやや難儀していることが物語るように、研究史理解の立場如何で霞んでしまう場合もある。

しかしながら、試みに、世界先史研究では位置付けの難しい縄文文化について、【縄文時代・縄文文化】をはじめ幾つかの関連項目も観読すれば、【新石器時代】【原始共産制】【階級・階層】などでも人類史的観点に照らした記述が確認できる。また、古墳時代研究で見れば、朝鮮半島での最新の成果も盛り込まれている。【古墳時代・古墳文化】でこそ扱いはないものの、【円筒埴輪】【前方後円墳】ではそれぞれ朝鮮半島での分布が指摘されており、それをもって任那に直接結び付けるような言及こそないが、後者ではその分布の意味する歴史的意義を認めているのである。外来という一方向的な視点でなく、戦後の反省を踏まえつつ中立的に逆方向のベクトルも提示しているのである。

(4) 近接諸学との対比と総合

はじめに人文学の他分野との関係を見てみると、文献史学や歴史理論との対比が強く意識されていることに気付く。確かに、【アニミズム】【持衰】など考古学の歩みとの直接的な関連を解説していない項目は、宗教学や文献史学などに対する過剰意識の現出であろう。しかし例えば、文献史学に関わるところでは、【銘文】【金石文】【木簡】といった直接的な関係は言わずもがな、【邪馬台国論争】のみならず【国分寺】【屯倉】などの遺跡の比定や、【古器名考証】のような遺物との対照、【度量衡】の存否や

実数の推定など、考古資料と文献記事との対比を考古学の側から試みる研究について、適切に解説されている。また、史的唯物論や社会進化論で議論される、【家族】【国・国家】【父系・母系】など様々な集団構成単位や社会状態については、どういった考古資料との対比が誰によって行われてきたか、整整にまとめられている。その一方で惑疑するのは、文献史学の存立基盤たる文字資料の有無に着目して名付けられた、「先史」という字を含んだ語の落籍である。例えば【近世考古学】よりも術語としての歴史が長い「先史考古学」でさえ項目が立っていない。【時代区分・時期区分】で触れているように、文字の存否による時代区分が考古学の立場にとってどれほどの意味をもつのかは検討課題であるが、ある種の経済史観や土地所有形態に基づく時代区分論を考古学的に追認していくこともまた困難である。「先史考古学」と並び用いられてきた【歴史考古学】のみを項目立てる編者は、「先史」という作業概念を排除したいのだろうか。あるいは、自らの文字をもつようになった日本国の成立からが日本考古学の本来的な対象たるのか、との邪推も生じかねない。実際に、民族学ないし文化人類学では考古学を先史学や先史考古学と等価的に理解さえしていた経緯を振り返れば、不親切な印象さえ抱く。

続いて自然科学との関係を考えて頁を繰ると、幾種もの理化学的分析法が項目として立っており、考古学がいかに自然科学の恩恵を授かっているのか実感する。既存の考古学事典類にこれほどの充実が見られなかったのは、もちろんこうした手法が未開発だったり学界に充分に浸透していなかったりしたからでもあるが、その普及に尽力してきたのが編集代表者である。なるほど遺伝子研究は、その成果に対する評価を定め難いからか、あるいはその倫理性が大きく問題化している近年の社会背景を踏まえてか、項目には見られない。【植物考古学】【動物考古学】ではほとんどないし全く触れられていないこの研究成果も、【イネ】【人骨】【日本人】などで採り上げられているのだから、現代社会上の注目度から見ても考古学の中での貢献度に照らしても、項目として独立させてもよかったのではないか。しかし、およそその一点を除けば、理化学的分析の方法や視点などが幅広く採り上げられ、原理や適用範囲や成果はもちろん、場合によってはその課題や問題点まで的確に説明されている。人文学でありながら自然科学的手法を大きく取り込むことによってさらなる進展を見せる考古学において、こうした分野についての記述の充実は、非常に有益である。

以上は、「考古学から」意識・期待された近接諸学との関係であるが、一方でそれらでは「考古学へ」の関与がどういった評価をされているのか、その点が本書にあまり反映されていない印象を与えているのが惜しまれる。日本史研究でのある種の補助学的な対応、日本民族学での先史学との同等視、自然科学界での亜流的冷遇など、考古学に対するこれまでの評価の一面だけでも、例えば【考古学】の項目で言及してもよかった。とはいえ、本書一冊で考古学の学際関係がかなりよくわかるようになったことは、考古学従事者にとって何よりの贈り物である。専門書よりはもちろん概説書よりも簡潔でありながら従来の事典類よりも詳しいので、隔靴掻痒の漸くの解消を喜ぶのは評者だけではあるまい。研究者に学際研究への一層の親近感を抱かせることによって、学術研究の新たな内的発展を促進してくれよう。

(5) 固有名称等の非採用

具体的な型式や人物・遺跡などは数が膨大であり、それ相応の事典類が既に存在する、という理由が序文に見られる。それはそれで非常に明快であり、本文に項目を立てなかったことを大胆な判断とみなせなくもない。調査や予算が減少してきている考古学界である種のワークシェアリングを意図しているのかもしれないが、確かに、通常の項目として採用してしまえば、煩雑さを回避することはまず不可能であろう。研究史上どの遺跡が重要でどの人物の貢献が大かを線引きすること、すなわち遺跡や研究者を総覧しその相対的な評価を基に選定する作業は、困難を極めるであろうことは想像に難くない。また、一度その評価を下せばどういったかたちであれ批判を受けることは避けられまい。しかし、読者の需要を前提とする事典の性格において、その姿勢が読者の支持を得られるのだろうか。当代の考古学の知性を結集して作成される事典において、同じ分野の他の事典類に依存する消極性は残念である。こうした遺跡名・人名などの情報供給による煩雑化を回避するには、付録や別冊としてそれらを内包ないし附随させればよいし、それによって記述内容の簡略も許容されるであろう。

あるいは、序文は非採用の理由についてさらに、そういった遺跡・人物等への評価の変動性を挙げている。だが、この変動性こそ生きている学問の宿命であり、証しでもある。知性の結集によって一時点でのその学問の到達点をマークする事典編纂事業にあっては、むしろそのいろいろな事物・人物に対して評価を下してこそ後世の研究史理解の助けとなるのである。

(6) 読む事典として

考古学に従事する読者にも、そしておそらくは、歴史全般に幾ばくかの関心を持つ専門以外の読者にも、本書のこのセールスポイントは遺憾無く発揮されるだろう。例えば、片や大学院や就職の試験に向けて勉強している次世代の考古学者の鍛錬という学術教育的観点に立ってみても、片や研究や仕事の場を異にしつつも過去の人間の有様に少なからぬ興味を抱く人たちの知的好奇心の充足という生涯学習的観点に立ってみても、わかりやすい表現に専心している点や、解説文でも小テーマに沿って細別を試みている点は、幅広い層の読者の理解を助けよう。そして文章構成も、学界誌等に頻見される複雑なものとは当然異なって、修飾関係がわかりやすく単純である。本書の利用者にとって「読み」やすいように、充分に気配りされている。確かに、一覧表や地図あるいは付録の類などの捨象は、理解しやすいという評価に反して映るかもしれない。しかし、そこにこそ「読む」ための配慮がうかがえる、と言えば皮肉に聞こえてしまうのだろうか。

瞬時の理解を要求する画像などに辟易するほどの現代にあって、こうした文字中心の情報伝達手段もかえって新鮮であるばかりか、読者に「考える」時間を供与してくれる。ある項目について、「引く」ことによって短時間に概要ないしは全体像をイメージすることはできるかもしれない。そして、そこに図表あるいはフローチャートなどが挿入されていれば、そのイメージはさらに膨らんでこよう。しかし、それでは、わかったつもりになることはできても、その項目の示す事柄について評価を下す視点さえも得られないこと往々である。引いたり見たりすれば内容を「感じ取

る」ことはできるが、「考える」には至らない場合が多い。もちろん、単純に、どこかで考古学に関する記述に出会いその字義がわからない、でもそれはおそらくは話の本筋に直接的な影響を及ぼさない、そんな状況で事典類を手にする機会は多くの人々に頻繁に訪れよう。それはそれでよい。しかし、辞典ではなく事典なのだから、考古学に関する事柄に対して何等かの疑問点なり問題意識なりのもとに手に取られるべきものであろう。その時には、むしろ本書のように、ある程度の考える意欲ないし時間を提供するものもあってしかるべきではないか。読者が「読む」姿勢で臨めば、手引きが効力を発揮してくれる。我々読者は、「読む」事典の供給の背景を省みる必要がある。

三　評　論　二――一読者として

引き続き、評者が感じたことのうち、上記に重複しない点をいくつか述べてみよう。

(1)　日本考古学の事典として

過去の人間の物質文化を材料にその主体たる人間を考察するのが考古学である、という立場がある。日本の近代考古学の父たる濱田耕作は、考古学をおよそこのように定義づけ、そしてさらにその立場を小考古学とも呼んだが（濱田耕作『通論考古學』、大鐙閣、東京、一九二二年）、この理解が現在の日本考古学の基層となっている。しかしその間、事典類などはしばしば、大考古学ないしは人類史の総合的研究を指向するかのように、直接間接を問わずに人類に関わる一切の資料を考古資料に含む道へ舵を取ろうとも試みてきている。小なるを嫌うは、本書も然りである。事物・現象等の究明を第一義とする「目的の学」から、究明手段の洗練順守を尊重する「方法の学」へと、いわば人類学から分家独立した考古学ではあるが、本家の人類学が形質人類学と社会人類学とに比重を移し始めてより後、再び目的の学にその目標を改めようと試みてきているのである。本評論では立場の是非を論じないけれども、とにかくこの動きは、本書をはじめその他の事典類や概説の考古学についての解説文に度々うかがえる。

だが逆に、【考古学】の項目などで総合的研究を主張すればするほどに、実際の日本考古学が人の手が直接関与した遺物や遺跡すなわち物質文化の分析に専心していることを反射させるのである。また、従来の事典類では、【遺跡】と【遺物】の項目に人の手の直接的関与をその指標として掲げているために、総合的人類史研究を望む立場の場合、【考古学】の項目との間にダブルスタンダードを発生させていた。研究の対象となる資料の幅に統一が見られなかった。本書では、これらの項目を一人が執筆することによって、その曖昧さを解消し、日本考古学の目的と対象資料との記述内容に一致を見せている。この合致は、学問として当然の前提のようであるが、この立場の事典類としては、本書がおそらく初めて実現させている。

学問の前提を考えるときには、その学術性すなわち目的と方法の自立は自明のこととして、社会性すなわち研究者の様々な社会的位置関係の確立も無視できない。この点で、日本考古学の事典たる本書において腑に落ちないのは、前期旧石器捏造問題の扱いである。項目で「前期旧石器」もなければ「捏造」もない。そこ

で、項目一覧や手引きを頼りに記述の可能性を期待できる幾つかの本文項目にあたると、【旧石器時代・旧石器文化】と【贋作・偽作・偽物】の二つに、かろうじて各々一文のみを見出すにとどまる。評者の目に触れない箇所がまだあるとすれば、そこに至らないのは我が非才ゆえかもしれないが、新聞報道や学界誌で得られる情報で気付く項目からはここまでである。言及の頻度と字数の少なさは一度過ちを犯した学界の慎重な姿勢を物語ると言えばそうなのであるが、全貌の解明以前であれこうした過失後のさらなる情報提示ないし現状認識表明は、社会一般の当然の要求である。本書は、「前期旧石器問題」ないしは「捏造」という項目において対処すべきであった。この問題こそが、現代の日本考古学界の特質を如実に示す問題なのだから。学術性という面では、層位学的方法と型式学的方法との関係、社会性という面では、国家意識と学問との関係、公金投下と埋蔵文化財評価との関係、アマチュア研究者と専門研究者との関係、そういった一切の特質を含む問題なのだから。

(2) そのほかの諸点

項目どうしのつながりという観点で見た場合、従来の事典類が物質文化の縦割り的な編集にとどまっていたのに対し、本書の動詞項目の採用は、項目横断的な効果を生み出しており、画期的な試みとしても高く評価できる。また、【花】【水】などの自然物を項目に立てたことも、同様の効果をもたらす斬新な着想と言えよう。その一方で、【器種・器形】【型式学】【組成】という作業概念においても、さらに高次の【インダストリー】【文化】【分布・分布図】にあっても、その解説内容の連関性や統一性に欠けるきらいがある。「社会」、「民族」、「言葉」といった考古学の枠組みを超えたさらなる高次概念を個別に直接的に言及するのが難しいことは理解できるが、考古学で独自に用いられ考古学全体に関わることの多い作業概念であるだけに、確かな一体性をもって臨むべきであった。

視覚的情報伝達という観点で見た場合、本文中にはおよそ四〇〇点のイラストを主体にしたカットが主に遺物の項目を対象に挿入されていて、実物を目にする機会の少ない読者の感覚的理解を助けている。特におそらく鉛筆一本で描かれた写実的なイラストは、何百何千年前の製作品ゆえの損傷や磨滅・風化によってかえって特徴を伝えにくい実物写真、あるいは考古学研究者には馴染みがあってもその他の分野の人には理解の妨げにさえなりそうな実測図、そういった視覚情報面での課題を見事に克服した伝達手段である。このアイディアもさることながら、イラストレイターの御労苦に敬意を表したい。またA5判の事典類にしては、比較的大きめの文字が使われていると同時に、行間にも充分なスペースを割いている。従って、ルビも細かすぎない大きさで行間に配され、読流を妨げない。細やかな工夫を感じ取れる。

本文以外に目を向けると、やはり、索引が望まれる。手引きはそれはそれで有用であり、製作の側の「読んでほしい」単語がそこに配置されていることはわかる。けれども利用者としては、「知りたい」単語が整理されていてほしいのである。手引きで大項目を見つけ出せないことには、結局知りたい単語の言及頁を知ることができない。例えば、よく使われる用語では、「物質文化」、

「共伴」、「胎土分析」などになかなか巡り会えないのである。もっとも、本書に限ることではないが、仮に項目再編を可能にしたCD版が供給されて読者がそれぞれの観点で項目編集を行えるような環境になれば、読者の工夫次第でこうした不満は解消されよう。このほか、日本考古学が絶えず欧米の思考方法・実践手段などを視野に入れながら展開してきた歩みを振り返るに、本書に外来語＝日本語の対照表が用意されていれば、ますます多くの読者を得ることができたのではないかと感じられるのである。

最後に、僭越のきらいはあるものの敢えて編集・執筆者の選定に関して一言。いろいろな項目を見ると、必ずしもその項目について、学界の第一線と評価される研究者が選定されているとは限らない。これは、学問の細分化と編集の円滑な遂行とのつり合いのなかで仕方がないとは思われるが、では敢えて、そうした項目などに、例えば女性研究者をもっと積極的に登用しては如何だったのだろうか。そもそも以下の見方こそ性差論を踏まえていないとのそしりを受けるかもしれず、また【男女】に詳しい解説こそあるが、項目として【狩猟】が立っているのに「採集」が採用されていないのは、やはり一般イメージに沿えばアンバランスに映る。女性の視点は、本書に、如何様に反映されたのだろうか。

おわりに

事典類は、ある段階におけるその学問のあり様を示す鏡である。そして学問のあり様とはすなわち、学問の自己展開、他分野や社会一般との関係、の二点に凝縮されるのであって、そのどちらにも大きな二項的関係が認められる。前者においては過去と未来があり、後者においては需要と供給の関係がある。また、人文学たる人間研究という点で見れば、これにもう一つの二項的関係、すなわち研究者の視点と行為者の視点が加わる。事典のような一時点での学界の知性の結集を試みる場合、これらの相対性をいかに認識しそしてその認識をいかに伝達するかが問われてこよう。その意味で、本書に見られる新たな試みは、人類研究の分野で大いに歓迎されるべきである。幾つかの側面はまだ不完全だが、社会一般との関係への言及と、研究対象者の視点の導入とに対して、斬新、画期的、と賛辞を贈ろう。もちろんこの斬新さは、既存の事典類があってこその相対評価ではあるけれども、上記の相対性の認識・伝達の洗練により、本書を糧に育つ次世代が改訂を実現させる頃には、本書の新たな試みは「前提」という絶対評価を獲得しているのではなかろうか。少なくとも現段階において、この鏡は、今までほとんど気付かれなかった過去と当代の光源を確かにとらえ、そして未来へ向けてそれをしっかりと反射している。

（二〇〇二年六月）

（A5判　本文九三〇頁　手引き五二頁　項目数約一六〇〇　図表点数約三七〇　二〇〇二年五月　三省堂　一三〇〇〇円　約一三〇〇グラム）

本年七月に編集代表のひとり佐原真氏の訃報に接した。心より御冥福をお祈りいたします。

（京都大学埋蔵文化財研究センター助手　　）